HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	万葉集羈旅歌の研究 : 行旅歌における「家の妹」と＜羈旅＞主題［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	関谷, 由一
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12072号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61694
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuichi_Sekiya_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：関谷由一

学位論文題名：万葉集羈旅歌の研究―行旅歌における「家の妹」と〈羈旅〉主題―

『万葉集』を平安期以降の和歌集から区別する重要な特徴として、都を離れた地への行幸やその他の旅の時に作られた歌の多さがある。従来、万葉の歌の作者は大和盆地の住人であり、その主たる内容は、旅先への恐怖の克服と、大和・都にある「家の妹」が象徴する〈家郷〉への回帰の願望であると見なされてきた。しかし、歴史学・考古学の成果によって明らかにされつつある古代の官人の居住や旅行の実態や、近年の万葉研究が〈王権〉との関わりで表現を捉え返す傾向にあることにより、このような前提は崩れつつある。古代の旅の歌の内容はどのような実質を持つものなのだろうか。その点の探究を、本論の課題とする。本論は、以下のように構成される。

第一部では、万葉の旅の歌の基本類型とされる「家」と「妹」との関係を問題とする。

第一章「〈留守歌〉考――行旅歌における〈共感関係〉の淵源――」では、万葉の行旅歌の、最も古く基本的な類型の一つといえる〈留守歌〉について考える。従来、家に残る妻が旅に出た夫を心配し、呪的共感関係を呼び起こす様式とされていたものであるが、実際は〈彼の地への関心〉をもって抒情するあり方であり、そのような〈私情〉の表出が、公的な旅と関わる場において求められたのであろう。その表現の結果見出された男女の〈共感関係〉こそが、文武朝以降、行幸従駕の場に持ち込まれたことにより、「家なる妹」を志向する様式の淵源となったとの見通しを示す。

第二章「万葉集巻四・五〇九・五一〇番歌考―旅中詠における「家」と「妹」をめぐって――」では、人麻呂よりやや後に属しつつ、赤人や遣新羅使人歌にも影響を与えた、「丹比真人笠麻呂下_筑紫国_時作歌」（４五〇九・五一〇）を取り上げる。当該長反歌は、その影響下の諸作と同様、「家の妹」を偲ぶ典型的な旅の歌とされてきた。本章では、その「家」の「妹」が、従来自明視されてきたような「家に同居する妻」と言えるのかを検証し、旅中詠における「家」と「妹」理解の問題を提起する。併せて、表現理解上問題となっていた長歌末尾の表現と反歌の内容について、旧来の理解に修正を加える。

第三章「〈「家」と「旅」〉論の再検討――山上憶良「日本挽歌」の「家」をめぐって――」では、山上憶良「日本挽歌」（５七九四～七九九）を取り上げる。この作品の研究史は、伊藤博氏の論文「家と旅」が大きく塗り替え、今日まで定説的位置を占めるに至っている。しかし、当挽歌での「家」は、「旅（タビ）」との対比の意識の中で用いられたものとは言い難いことや、「かたちはあらむを」「大君の遠の朝廷」「国内」といった表現理解の問題、などにより、伊藤論の説くような、歌中の「家」「国内」を「奈良」と見

なす立場には従い難いことを述べる。

第二部では「羈旅」という題・標目を持つ歌群を問題とする。

第四章「「羈旅」歌とは何か――大伴卿傔従等の「悲傷羈旅」歌の場合――」では、巻十七冒頭の「悲傷羈旅」歌（№三八九〇～三八九九）を取り上げる。天平二年の大宰帥・大伴旅人の帰京時に旅人の従者である「傔従等」が詠んだとされるこの作品は、「悲傷」の題にふさわしく「後ろ向き」の内容を持っている。そのことが、官人が都に近づくという状況と整合せず不審とされてきた。しかしそれは、万葉の「羈旅」歌を「異郷に在る」ことの違和や悲哀をうたうものと見てきたがためであり、漢語「羈旅」の本来の表現性を考慮すれば、むしろ慣れ親しんだ者との離別を苦とするのが「羈旅」の「悲傷」であると考えられる。すなわち〈羈旅〉主題とは、異郷に在ること全般ではなく、畿外への往還等の長距離の〈移動〉に関わるものであるといえ、その観点からの「羈旅」歌の再検討の必要性を提起する。

第五章「柿本人麻呂「羈旅歌八首」の位置――〈羈旅〉主題化の始発――」では、「羈旅」歌の始発に位置づけられる柿本人麻呂「羈旅歌八首」を取り上げる。当該八首は「羈旅係恋」の情を描き出した最初の作品として評価されることもあるが、むしろ注目すべきは、「船近付きぬ」「旅行く我」「行き過ぎ」などと旅行中の自らの姿を動的に描き出すことに重きを置いている点である。そのことが意味を持つのは、王権の中心たる畿内（「大和島」）と畿外を対置的に描くためである。そこに、「羈旅（之臣）」の意識を根底に置き、王権から遠ざかってゆく〈移動〉の過程自体をうたうことによって、「家なる妻」への意識をも包摂した〈羈旅〉の全体を歌の形に描き出す試みと認められることを述べる。

第六章「「棚無小舟」考――巻一・五八番歌の象徴性と表現史上の位置――」では、高市黒人による、大宝二年十月の三河行幸時の作（１五八）を取り上げる。本作は「棚無小舟」の行方に思いを馳せる作であり、ここに黒人の個的な〈寂寥〉を読む見方が通説的理解となっている。しかし、文武朝の官人たる黒人を、同時代から切り離された特異な詩人として描き出す把握には大いに問題がある。そもそも「棚無小舟」に「寂しさ」の象徴を読むことには明確な根拠がない。一首に寂しさを感じるのは、舟が去りゆくものとして詠まれているためであり、そこに他者の視点の導入という工夫が見られることを述べる。

第七章「高市黒人「羈旅歌八首」の位置――〈羈旅〉主題の成立――」では、前章で更新された黒人像を承けて、その一部に作者の個我の産物といった過剰な象徴性が読み取られてきた黒人「羈旅歌八首」（３二七〇～二七七）の読み直しを図る。従来、当該八首は「人間存在の奥底をつらぬく寂しさや悲しさ」と解されてきた二七〇番歌などと、戯笑的な宴席歌とみなされてきた二七六番歌とが混ぜ合わされているとされ、統一的な把握がなされてこなかった。本章は「羈旅」歌として当該八首を理解する立場から、八首には畿外を移動する身であることの強調と、その土地で出会い別れなければならない景物や人への愛着、旅中ゆえのその断念の形象化といった点で、一貫した主題が認められることを述べる。

第八章「万葉集巻七「羈旅作」考――巻七雑歌部における〈羈旅〉像――」では、巻七雑歌部の「羈旅作」(一一六一～一二五〇)を取り上げ、そこに見られる傾向を探る。当該九〇首は従来、原資料そのままの反映と見られる傾向があった。しかし、「羈旅作」より前の雑歌部が大和・畿内の地名を詠む歌を収め、〈海〉に関わる物象語を詠む歌を排除するのに対し、「羈旅作」が畿外地名を収め、〈海〉に関わる物象語を詠む歌を多く収めるという分担関係があることから「羈旅作」は原資料の反映ではなく、編纂の段階で巻七全体を見通す者によって、〈畿外〉・〈海〉に関わる位置を与えられていると考えられる。また、「羈旅作」九〇首の地名を見た時、「大きくは五畿七道順に則った、かなりの程度の統一体」としての性格が認められると同時に、地名の配置と連動した〈旅人の動き〉による大まかなまとまりが見られる。以上により、巻七「羈旅作」に一つの〈羈旅〉の印象を読むべきことを述べる。